

## 平成二十九年度学位記授与式式辞

平成三十年三月十七日（土）

アイザック小杉文化ホール ラポール

本日、山崎副知事をはじめ多くのご来賓の皆様をお迎えし、平成二十九年度富山県立大学工学部・大学院工学研究科の学位記授与式を挙行できますことは、誠に喜びに堪えません。これも、ご来賓の皆様をはじめこれまで本学の教育・研究を支えてくださった多くの関係の皆様のご支援、ご尽力の賜であり、教職員を代表し、心から御礼を申し上げます。

そして、今日の佳き日を迎えられた工学部・大学院、計〇〇〇名の卒業生・修了生の皆さん、本当におめでとうございます。また、ご家族の皆様には、お喜びも一入のことと存じます。

さて、皆さんは本学在学中に、多くの研鑽を積み、講義や実習、あるいは学位論文研究に取り組み、また、友人や教職員との交わりを通して、専門知識のみならず、物事を見通す目、考える力、専門分野において問題を捉え解決する手法、また、コミュニケーション力や、自己学習力など、エンジニアやリサーチャーとして、必要な能力に加え、人生・社会を生きていく上で大切な様々な「力」を習得されてきたと思います。

皆さんのなかには、これから社会に出て活躍される方、また大学院に進んで、さらに勉学を深めようとする方がおられます。皆さんは、これから、難しい仕事や難解な研究テーマなど、自分の力だけではとても解決できそうにない、いわゆる「壁」と言われるものに遭遇すると思います。その「壁」は、仕事に限らず、人間関係の壁、技術の壁、研究の壁など、様々な場面で待ち受けています。この壁を「勇気と好奇心」を持って乗り越えてほしいのです。

本学において、「チャレンジする勇気」と「失敗を恐れない勇気」、そして「貪欲な好奇心」を学んだことと思いますので、この「勇気」と「好奇心」で難題を克服してほしいと思います。

本日は、ここで、「勇気」と「好奇心」で難題を克服するエンジニアやリサーチャーの例として、私が個人的に「皆さんの中で、一人でも二人でも、こんなエンジニアやリサーチャーになってくれたら、いいなあ」と思い描いているイメージがあるのでそれをお話したいと思います。

具体的な会社名を挙げて、お話しします。

皆さん、カシオという会社を御存じだと思います。正確には「カシオ計算機株式会社」といいます。この計算機というのは、電子計算機ではありません。カ

シオは、創業時の 1957 年時には電気継手といわれる電気部品リレーを利用したリレー式計算機などを生産していました。それまで、手回しの機械式の計算機しかなかった時代に、歯車などの機械的機構を用いず、演算素子にリレーを使った小型純電気式計算機でしたので、大変よく売れ、業績は絶好調でした。

ところが、1964 年にシャープが オールトランジスタダイオードによる電子式卓上計算機を世界で初めて開発しました。これが、電卓競争の始まりです。

しかしそのサイズは 40cm 前後、重量は 30kg から 50kg と大きくて重く、価格も 40~80 万円とたいへん高価でした。大卒者の初任給が 21,500 円、という時代ですから。

ですから、創業者の樫尾 4 兄弟は、シャープの電卓をみて「こんなものは売れない。カシオはこれまで通り、リレー計算機しか作らない」と会社方針を出します。そして、週末には、兄弟 4 人でゴルフを楽しんでいました。しかし、たった数か月で、カシオの計算機は、シャープの電卓にシェアを奪われていき、倒産寸前にまで追い詰められます。

そのとき、カシオの社員の中に、会社の方針に背いて「これからは、トランジスターの時代ではないか」と考え、電卓の開発をしていた社員がいたのです。その研究開発を種に、カシオは全社で電卓開発に参入します。そして、シャープに遅れること、1 年で、電卓 1 号機を市場に投入します。価格も 38 万円台でした。実はこの方のようなエンジニアが本学卒業生から出てほしいということをお願いしたかったのですが、この考えは私の全く個人的なものです。

私は、ひそかに電卓を開発研究していたこのエンジニアも偉いと思いますが、それを黙認した課長も偉いと思っています。ちなみに、この時以来、樫尾兄弟 4 人で週末ゴルフをするのはやめたそうです。

その後、日本では電卓産業が盛んになり、最盛期には参入企業が 50 社以上に達しました。各社入り乱れての開発競争・価格競争があまりにも熾烈であったため、「電卓戦争」と呼ばれたこともありました。

結局、シャープとカシオの 2 社だけが生き残りました。

カシオはその後も堅実な成長を遂げています。シャープは大きな浮き沈みがありました。最近また株式の一部上場を果たしたようです。

ここで、誤解しないでいただきたいのですが、私は、皆さんに「会社に逆らえ」と言っているわけではありません。会社の方針に疑念がなければ、その方針に従えばいいのです。しかし、少しでも疑念があったら、冷静に考え、かつ自分の信念に従い、「勇気」と「好奇心」で難題を克服するエンジニアやリサーチャーになっていただきたいということです。

私は、この難題に挑戦するエンジニアやリサーチャーこそ、本学の卒業生の真骨頂であると思います。

本学卒業生の特徴は何ですかと問われれば、私はこう答えたいのです。「派手さはなくて、一見目立たないかもしれないけれど、どんな難問にも、コツコツと粘り強く立ち向かい、最期には解決してみせる優秀な人材です。」と。実際そ

う思っています。

その難問に立ち向かうとき、自分だけで悩まないで、ぜひ本学を利用してください。本学には昔も今も優秀な教員がそろっています。皆さんが社会で数年経験すれば気づかれると思います。

日本は戦後大きな経済発展を遂げてGDP世界第2位の地位を占め、科学技術、産業両面で世界に対して存在感を示してきました。しかし今日では、社会は少子高齢化と人口減少が進み、経済も成熟段階に入って、規模では新興国を下回り、それだけでは存在感は得られなくなっています。この時期に、日本の発展段階を再認識し、先進国、開発途上国に対して今日の立ち位置を確立し、尊重される国であり続けることは極めて重要なことであると思います。そのために皆さんへの期待は大きいのです。

皆さんは、「チャレンジする勇氣」と「失敗を恐れない勇氣」、そして「貪欲な好奇心」という知識では得られない大切なものを身につけています。私は、このことが皆さんの発展の原動力になるものと信じています。活躍を期待します。

富山県立大学は、平成27年4月の公立大学法人化に伴い、県内産業を支える人材の育成と若者の定着を図るため、産業界のご意見等もお聞きしながら、一層魅力ある大学となるよう、学科の拡充・新設に取り組んでいます。

また、1昨年4月には、機械システム工学科と智能デザイン工学科の2学科で、定員を10名ずつ増やしました。

昨年4月には、情報システム工学科と環境工学科の2学科について、名称をそれぞれ電子・情報工学科と環境・社会基盤工学科に変更するとともに定員増を行いました。また、工学部では全国初となる医薬品工学科（定員35名）を新設し、これらにより入学定員を平成二十七年度に比べて100名増やし、330名といたしました。

こうした定員増に対応するため、新校舎を建設しています。

さらに平成31年度には看護学部（定員120名）を創設することとしており、富山県立大学は地域の知の拠点として、ますます発展していきます。この拡充計画は、石井富山県知事はじめ県関係者、県民、職員、議会の皆様の温かいご支援のおかげです。

皆さんも温かい目でこの発展を見ていただきたいと思いますし、ぜひ富山県立大学の卒業生は「どこか違うなあ」と言われる存在になってください。

皆さんが、目の前の壁から逃げることなく、何事にもチャレンジする勇氣、失敗を恐れない勇氣、そして貪欲な好奇心を持って、これからの仕事、勉学に取り組まれ、社会に貢献する立派なエンジニアやリサーチャーとして、大きく、大きく成長されますよう心から祈念し、私の式辞といたします。

平成三十年三月十七日

富山県立大学 学長 石塚 勝